

移行過程における人間関係の発展
お茶の水女大家政 平野尚子

目的 本研究は、^{*}関係学を基礎とする「親子関係の発展過程に関する研究」(第32回発表)に続くものである。前回は、親子関係の発展過程について非言語動作を重要視して13に類型化し、内から外への移行過程において交差領域活動を展開すること、子供の動きの変化に即して親が変わりながら親と子と状況の関係変化の過程を細かくつくっていくことが重要であることを明らかにした。今回は、交差領域活動における「間关系的なかわり方」に焦点をあててさらに考察をすすめる。

方法 参加観察法(1980年度お茶大乳幼児集団研究会、児童集団研究会月曜午前グループ)心理劇法による。

結果と考察 親子が未知の状況に参加する内から外への移行過程においてどのように人間関係が変化していくか、そこでの発展の契機となるかわり方などの様なものがあるかについて関係構造、子供の力・エネルギーの方向、舞台の領域、距離、通路、非言語動作等を手がかりにして分析考察する。1)未知の状況との出会いのはじめに母子間の身体接触を持続する。2)母子が未知の状況をじっくりと見る。3)母と子との身体的な距離の保ち方を子の内的エネルギーの方向により調整する。4)母子と未知の状況との距離の保ち方を出会いが生まれやすい位置関係や方向により工夫する。5)母子の居方をそのまま生かし、それを包みこむ流動的な空間を用意する。6)母子と未知の状況の両方に共有可能な領域を設定する。7)自発的な行為をさそう言葉かけ、8)参加の余白をもつ用かれた呼びかけ。9)意識の転換をもたらし音。10)未知の状況への参加のきっかけとなる物等がある。(論文指導、黒田淑子)^{*}引用文献、松村康平他「適応と変革」『関係学研究』第1～8巻、松村康平「心理劇—人間関係の変革」他。